http://collective-music.com/

PRESS COLLECTIVE

— WINTER 2017 —

collective vol.41
11th February 2017
@event space 雲州堂

edit: tawaki text: Itaru Wakui, 楠田行展 , tawaki, kengomatsui design: yukiokimura.com

旧本探訪

Itaru Wakui

宮沢章夫『東京大学「80年代地下文化論」講義』という本がある。宮沢が80年代の日本の文化について東大で講義し、それを書籍としたものだ。この本のオビには、「80年代は『バブル』で『おたく』で『スカ』だったのか?」とある。はたしてどうなんだろう。

さて、地下あれば地上あり。地下については宮沢本を読んでもらうとして、同時代の地上にはどのような文化が広がっていたのだろうか、それを少し探ってみよう——。

宮沢の講義は「ピテカントロプス・エレクトス」という文字通り地下にあったクラブを議論の出発点とする。対して、泉麻人『丸の内アフター5』は、その書名の通り東京丸の内を話しの中心とする。丸の内といえば、健全ないかにも日の当たるところのイメージである（としよう）。そこで働く人たちに話しを聞いたこの本の、とまれひとまず文庫カバーの紹介文をみてみる。「憧れの丸の内界隈に棲息するヤングエグゼグティブとOLたち。ギョーカイ自由業人を代表して泉麻人が生身の彼らにあれやこれやおつきあいいただいた〝ニッポン組織社会人〟サラリーマンのアフター5生態学。」

「ヤングエグゼグティブ」「アフター5生態学」といった言葉に時代性を感じる。要するに丸の内に勤務する男女に著者の伝手を頼りに話を聞くというのがその内容で、1990年に文庫化されているのだが、もともとは昭和60年から『月刊現代』で連載されたものという。昭和60年＝1985年。つまり30年以上前のサラリーマン・OLの実態を知ることができる貴重な記録なのだ。まさに隔世の感というその中身から幾つか引用してみよう。

企業の人事採用マンに話しを聞く章では、次のようにある。「ところで昨年あたりは、いち早く内定を出した学生たちを観光バスに乗せて温泉宿に監禁してしまう——等々のダイナミックな人採り合戦がマスコミで話題をまいたが、今年あたりの状況はどうなのであろうか。」

まさに『就職前線異常なし』（織田裕二主演、1991年公開）を地でいくエピソードには「マジすか!?」の一言しかない。驚きである。

あるいは「伊勢丹レディ」に話しを聞く章では会社の慰安旅行の話題が出てくるのだが、これも強烈。「慰安旅行のパターンは（中略）まず社内で早速宴会がはじまり、移動の貸切列車内では「新入社員歓迎の野球拳大会が火ぶたを切」るという。野球拳のためにたっぷり厚着に着込んだ先輩によって身ぐるみ剥がされたうえに「素っ裸にされた新入りは女店員やお偉いさんの乗車している他車両まで駆け抜けていって、あいさつ代わりに缶ビールの一気飲みでもして戻ってくるわけだ」って、何をやっているのか。

さらに、いまやなくなってしまった職種である「東証場立ちマン」のエピソードも興味深い。場立ちマンとは、「東京証券取引所の株券売買立会場で、いわゆる株のセリを行っている男たち」のこと。一昔前のニュース映像などで目にする、指で符丁を出しあいながら叫んでいる人たちだ。いまや株式取引にこうした人力は不要となったため場立ちマンという職種もなくなったわけだが、当時の立会場には2000人もの場立ちマンが駆け回っていた。したがって靴は消耗品で「その消費率は並大抵ではない」という。まさに体力勝負。スポ根に近い。

総じて景気のよい話しばかりという読後感を与える本書の一服の清涼剤ともいうべき位置づけとして各章冒頭さらにはカバーにも蛭子能収の四コママンガが配されている。しかも本文の景気のよさとは対照的な不条理マンガが最も色褪せていない。

もう一冊、同じく泉麻人の『街のオキテ』は昭和61年に単行本として刊行され、昭和63年＝1988年に文庫化されたもの。例によってまずカバーの紹介文を引用しておこう。「本書は〝東洋で〟最も屈折した形式のシティマニュアルである。主だったデートコース、グルメの通うレストラン、いい男になるためのさりげない身だしなみ等をとりあえずわきまえてしまった諸君に、東京23区の偉い順、今、恥ずかしいカセット、〝渋谷の危ない待ち合せ場所〟等、よりハイレベルなオキテ30条を伝授するものである。」

84年9月より『ポパイ』に連載されたコラムをもとにしたというこの一冊にはいかにも80sな感じがあふれている。シティマニュアルという自己規定、「諸君」という呼びかけ、そしてカセットという媒体——。

ここでは、恥ずかしいカセットのランキング、そしてその説明を載せておこう。

①スリラー／②フラッシュダンス／③キャッツアイ／④愛のコリーダ／⑤ライディーン／⑥ダンシング・オールナイト／⑦ライドオンタイム／⑧関白宣言／⑨もしも明日が…／⑩フットルース／次パールピアス

「もちろん、これらの曲も、埼玉県深谷市のどうでもいい商店街のはずれあたりで流れる分にはさほど人体への影響は少ない。しかし『フラッシュダンス』が次に入っていることに気づかぬまま、渋谷公園通りに迷い込み、パルコ前のスクランブル交差点のど真ん中で運悪く赤信号に引っかかり、いきなり耳をつんざくようなイントロが愛車ソアラの窓の外に放たれてしまったとき、体内の血糖値は一気に低下する。」

どうでしょうか。恥ずかしいらしいのだがそのメンタリティはよくわからない。「3か月ないし2年以上前に大々的に流行った曲、というのが極めて危険な状態にある」そうだ。ともかく80年代の「地上」の文化とは、かようにひねくれたものであったのだろうという察しはつく。景気はよいけど風通しが悪い、そんな印象だが、はたしていかに。

備忘録

夢の街跡 第9回「丸亀を歩く」

楠田行展

瀬戸内海沿岸にある香川県丸亀市は、琴平町に鎮座する金刀比羅宮（ことひらぐう）の参詣口として栄えた港町です。往時は〝こんぴらさん〟参りの娯楽の一つとして、福島町と西平山町の2カ所に遊廓がありました。今回は、江戸時代からの私娼、明治期の遊廓、そして戦後の赤線と時代の変遷とともにあった丸亀の女性街をご紹介します。

遊廓については、大正14（1925）年に丸亀商工会が発行した『丸亀商工案内』に詳しく、「文化文政年間の頃は芝居定小屋及び藝娼妓遊廓の設置ありて、頗る殷賑の地なりしかば、遊客の主なるものは悉く福島湛甫（たんぽ）に上陸せし」と記述がありました。湛甫は船溜まりのこと。福島は、文化文政年間（1804～1830年くらい）には遊客で非常に賑いましたが、天保期（1830～1844年くらい）から西平山に勢いを奪われました。どちらの街も遊廓としての許可を明治19（1886）年に受けたようです。

また、上村行彰が昭和4（1929）年に出した『日本遊里史』によると、福島には貸座敷が15軒で69人の娼妓がいて、西平山には22軒貸座敷があり、娼妓が77人いた模様。戦後の赤線時代の同31（1956）年には、福島で20軒・52人、西平山で20軒・65人と推移しました（『香川県警察史』）。両町ではその後、売春防止法施行2日前の同33（1958）年3月30日まで営業を継続し、両町合わせて10軒の業者と30人の従業婦が働いていました（『四国新聞』）。

福島町には、誰が見ても〝それ〟と分かる大小のタイルが貼りめぐらされた洋風の看板建築が残っています（写真）。装飾された窓にはステンドグラスの〝帆掛け船〟が。いかにも丸亀らしいですね。〝こんぴら船々追い手に帆かけてしゅらしゅしゅしゅ～♪〟。付近にある名店「一鶴」の骨付鶏とビールで一杯やった後、街を散策することをお勧めします。

【主な参考資料・文献】

『香川県警察史』香川県警察本部
『四国新聞』四国新聞社
『全国女性街ガイド』渡辺寛／季節風書店
『日本遊里史』上村行彰／春陽堂
『丸亀商工案内』丸亀商工会

Column

ヒノテルのススメ

tawaki

日野皓正／ディトアー（1988）

この数年、和ジャズを買うことが多いのですが、クオリティの高い作品が多く、驚いています。DJの端くれとして、知られざるミュージシャンの発見に勤しむこともあるのですが、今回は誰もが知っているヒノテルを取り上げます。

ヒノテルこと日野皓正は、1942年生まれのトランペッター。現在は70歳を超えた大ベテランです。クラブ界隈では1980年代前後のフュージョン期が定番（例えば1979年の『city connection』）で、僕もこれを契機に「ヒノ堀り」を始めた次第。この時期はヒノテルが最も旬だったこともあり、中古市場に在庫多数。というわけで安く手に入ります。

次に手をつけたのが、1970年から1975年頃にかけてのスピリチュアル・ジャズ期。この時期の作品はフュージョン期と違って、内省的かつ先鋭的ですが、総じてハイ・クオリティ。中でもオススメなのが、1972年にリリースされた『fuji』。このアルバムは日本が生んだスピリチャル・ジャズ屈指の名盤。フリージャズ的な要素は少なく、聴きやすいのですが、じんわり体が熱くなります。特にこの盤に収録された「be and know」は名曲です（youtubeでも聴けます）。

1970年代中頃までの諸作品を通じて、ヒノテルの才能に惚れ切った僕は、年代を無視して作品を買い漁る状態に陥っており、先日はついに禁断の1980年代後半の作品にも手をつけてしまいました。1970年代に活躍していたミュージシャンは1980年代にピークを過ぎてしまい、1980年代も後半になると緊張感のない駄作を作ってしまうことが世の常。しかしヒノテルは例外。独自領域を開拓していました。その代表格が1988年の『detour』。音もジャケもかなり賛否が分かれそうなこの盤ですが、僕は「賛」に一票。DAM-FUNKも真っ青なぶっといメロウ・ファンク～ブラコンが奏でられています。

というわけで、どの時代を切り取っても魅力的なヒノテル。レコ屋で見つけたら、とりあえず針を落としてみてください。きっと意外な発見があると思います。

Music Review

Solange / A Seat At The TABLE

kengomatsui

2016年作アルバムで僕が最も好きだったのが、「Beyonceの妹」ことSolangeのこの作品です。

僕は年齢とともに、派手さや大きな抑揚、あからさまな煽りの少ない音楽を好むようになりました。このアルバムは、Solangeの柔らかなボーカルもすっと染み込んでくるし、トラックも重心低めのゆったりとたおやかなグルーヴのR&Bです。プロデュースはRaphael Saadiqと書けば、collectiveの皆様も気になるでしょうか？

ちなみに彼女の2012年の曲『LOSING YOU』もマドンナ×アフリカといったムードで非常にクールです。ビデオもオシャレなのでぜひYoutubeで見られたし。僕はBeyonceの曲を一つも知らないですが、この曲以降妹のほうには注目をしています。